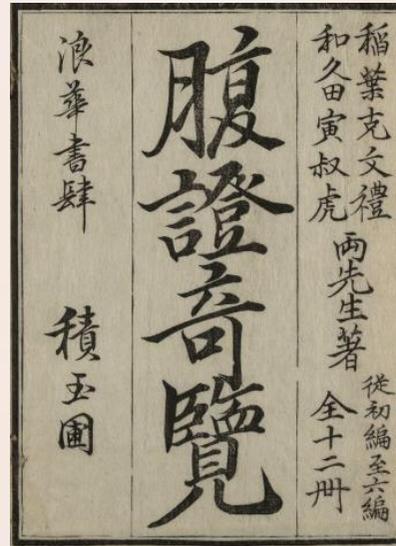


第1回

腹証奇覧・奇覧翼を読む



師匠と弟子の物語

峯尚志



漢方の診察法

望聞問切

望診：現代医学でいう視診だが、さらに深く患者さんの全体像をみる診察法。

聞診：患者さんの声や、腹鳴など患者さんから発する音を聞く診察法。聞香という言葉があるように匂いを嗅ぐのも聞診に入る。

問診：患者さんに直接問いかけて情報を得る診察法。

切診：患者さんに実際にふれて確かめる診察法。

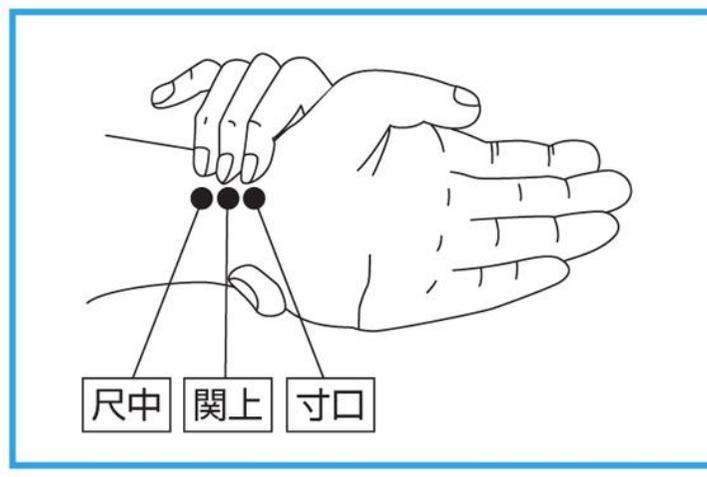
脈診と腹診があり、中国では脈診が、日本漢方では腹診が発展してきた。



舌診（望診のひとつ）



脈診



腹診



倭名類聚鈔

(平安時代の大和言葉の辞書)

きも (肝臓)
よこし (脾臓)
ふくふくし (肺)
むらと (腎臓)
はらわた (大腸)
ほそわた (小腸)
くそわた (胃)
ゆばりふくろ (膀胱)

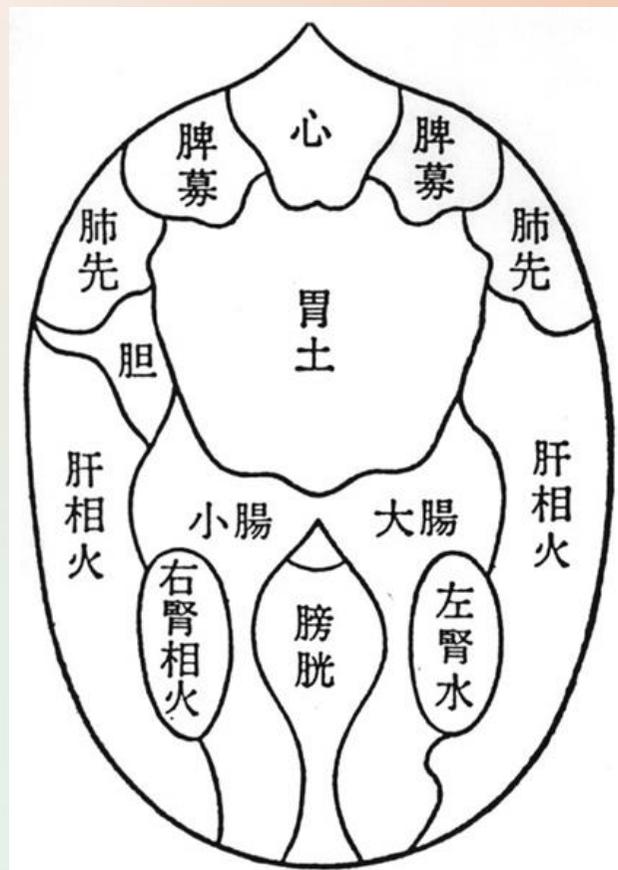
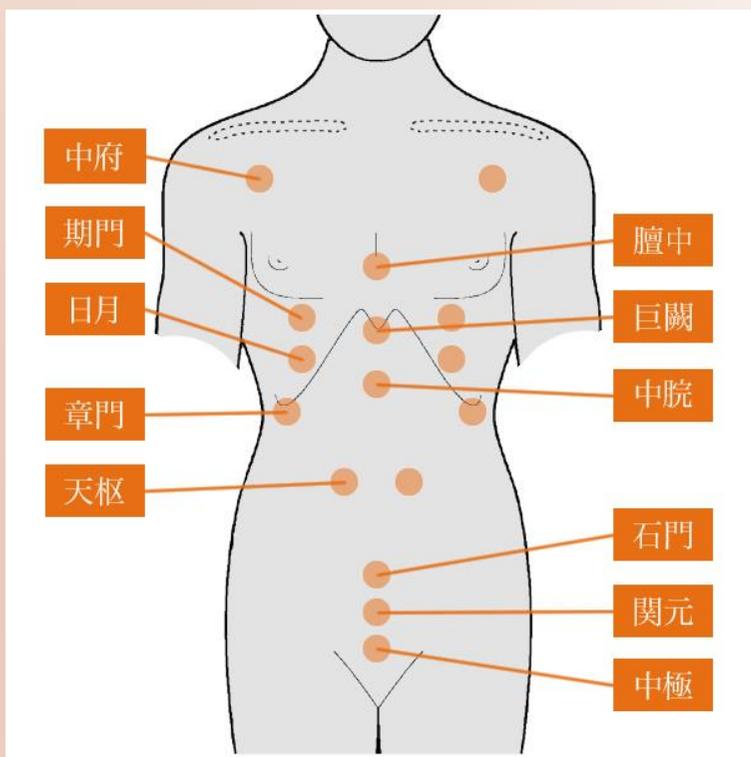


日本人と腹

- 人の腹を読む
- 口と腹が違う
- 腹を割って話す
- 腹が黒い
- 腹に据えかねる
- 腹をかかえて笑う
- 腸（はらわた）が煮えくり返る



夢分流腹診図 (1685)



傷寒系の腹診 薬方に相對する腹証

単なる切診ではなく



必ず望診を伴う

方証相對の要



日本で進化発展した腹診

腹診は特に日本の江戸中期の傷寒論、金匱要略を重視する古方派の台頭により大いに発展をとげた。その集大成といわれるものが稲葉文礼による腹証奇覧と弟子の和久田叔虎によって書かれた腹証奇覧翼である。

両書は、主に傷寒、金匱の処方にマッチする腹証を図に示し解説を加えたもので、現代においてもその価値は少しも損なわれることがない。



腹証奇覧の 著者 稲葉文礼の来歴

生年不詳
滋賀県湖南の人



文礼翁のかたり

なにわ風にデフォルメして
お伝えします



幼少時代

わしはガキのころ
ととやかかかに捨てられたんや
広い世の中にたった一人、、、
生きてきたんや



ひとのことはどうでもええ
生きるために、だまし、
かっぱらい、喧嘩、カツアゲ
悪いといわれることは全部やった



医の道をめざす

でもなんかむなしいというか、こころの空洞は埋まらんかったんや。根は直っすぐなおとこやったから、ダチはいた。

そんなダチの一人から人を助けて、金が稼げる医者という仕事があることを聞いた。

俺は医者になりたい。こころの底からそう思った。



医の道を志すが、門前払い

そやけど、読み書きができんから古典を読むことも、講義をきくこともでけへん。しょうがないから名医といわれる先生のところに片っ端からいって医者になる方法を聞いて回ったんや。まあ、大概のところは相手にしてくれへんかった。門前払いというやつや。



ついに師に出会う（1775年）

それでもわしはあきらめんかった。

そしてただ一人
弟子入りを許してくれた医者がいた

鶴泰栄という
腹診の名医やった



腹診の名医 鶴泰栄先生

鶴泰栄先生は吉益東洞の門人ではないが、東洞を尊敬して古方を研究し、腹診の達人やった。泰栄先生がいうには、「おまえは、学問はないが、見どころがあるから、わしの弟子になれ、お前は本は読まんでいい。腹診なら文字が読めずとも患者さんに直に触れて学ぶことができる」といつてくれた。それから必死に腹診の術を学んだんや。



ひたすら患者をみる

とにかくわしは患者をみた。
金のない、飢えた、痩せこけた患者、よその医者にみ
てもらえない患者ももちろんわしはみた。
わしはただただうれしかった。
そして必ず病人の腹をみて腹の中をうかがい、どんな
処方があうか、どんな生薬を使えばいいのか、ひたす
ら経験をかさねた。
まあ、酒だけは、やめることはなかったけどな。



浜松で和久田叔虎と出会い術を伝える

そんな生活を20年ほどおくったある時
わしは甲州の浜松で和久田叔虎という男に出会った。
読み書きもでき几帳面で頭のよいまじめな男だった。
そしてひたむきに病人さんを治したいという気持ちでわしにぶつけてきた。
母を治してくれなかった医者への恨みや怒りも聞いた。
わしは、はじめて自分の同志に出会ったと思った。
それでわしは数か月浜松にとどまって叔虎と語り合い
患者をみながら、自分の習得した腹診の術をすべて叔虎
に伝えたんや。



東へ西への旅立ち（1795年）

そのあと叔虎（通称寅）は江戸に移り住み、
わしは西を目指して遍歴の旅を続け
京都にたどり着いて、
ここに落ち着いたんや。

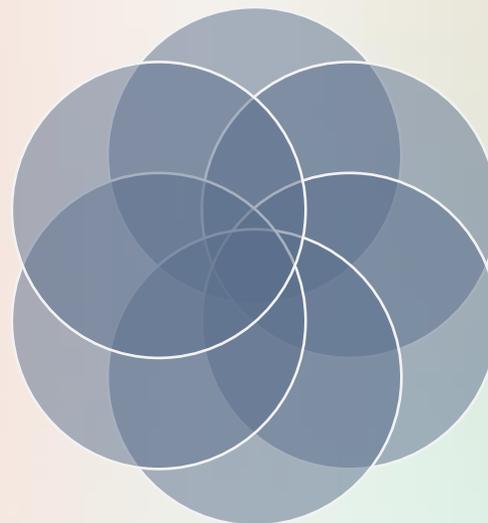
そこでさらに腹診の術を
深めていったんやけど、、、



オールスターぞろいの京都では わしは虫みたいなもんやった

吉益東洞(1702-1773)門人536人

吉益南涯(1750-1813)門人3000人



中神琴溪(1744-1833)

片倉鶴陵(1751-1822)

和田東郭(1742-1803)

杉田玄白(1733-1817)



まあ、やけになったわけや

わしにも2, 3人の弟子はいたんやが、しゃべれない品のないわしは京都のひとにはあまり受け入れられなかった。

それで、おもしろないわしは、もともと酒好きやったこともあって飲んだくれるようになった。

不摂生がたたって1797年ついに脳卒中で半身不随となったんや。その時は、漢方やらんやんやら考えて、なんとか回復したんやが、、

それでもなんか寂しゅうて酒がやめられず、結局、何回も半身不随になったんや。



このままではあかん

ここにきて、ついに酒を断って、自分が会得した術を後世に残したいと本気で思ったんや。
そこでこっそり門弟の宗輔に相談したんや。



宗助曰く

先生の性格は実直でその術はすばらしいけど、その言行には品格がまったくありません。

たとえば先生が京都の都会で門人を集めたとしても、おそらく誰も弟子は集まらないし、先生にかかろうという患者もたいしていないでしょう。惜しむべきことです。



執筆の勧め

先生の到達した腹診術を、あまねく天下後世に伝え、多くの人を救うためには書物を遺す道を選ぶのが一番やと思います。

先生、私が手伝いますから本を書きましょう！

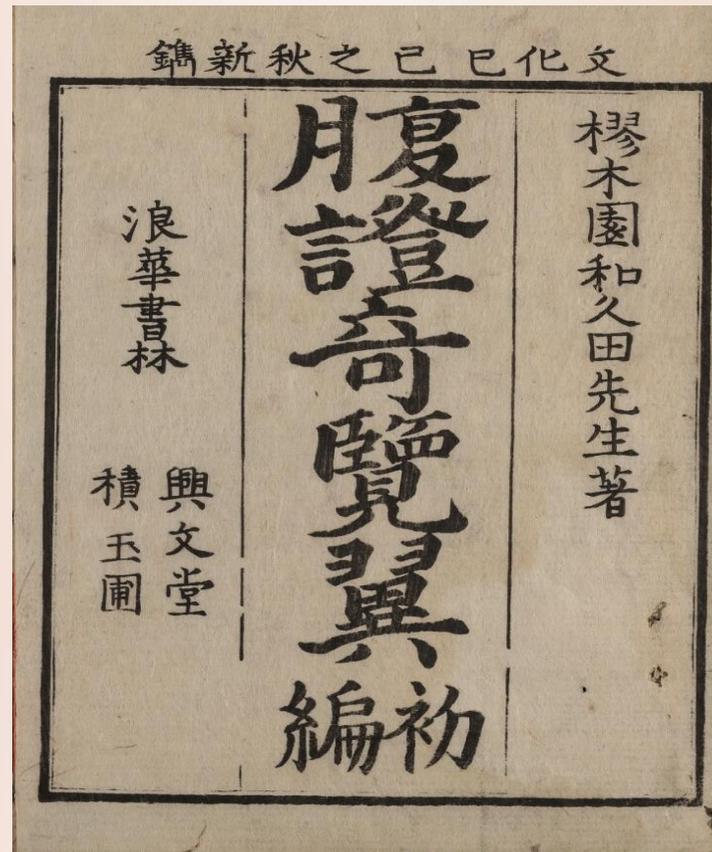


腹証奇覧の発刊

こうして
門人たちの手によって
1799年
稲葉文礼著作の
腹証奇覧が出版された



腹証奇覽翼の著者 和久田叔虎の来歴



生年、
没年不詳



母の長い看病

私は小さいころ父と兄を亡くしました。母も病に倒れ6年の間、薬を飲んだけれどもただの一度もいい医者には巡り合えませんでした。

その後、上の兄が奉公に出てからは、私がひとりで母の看病をしました。もともと病弱で、私も看病疲れで体をこわしていきました。母も年をとり、良医に巡り合うことなく、病はいつこうに改善しませんでした。



医をめざす

そこで私は自分が医師になることを決意し、
いろいろな医師に教をこいました。

しかし、自分が尊敬できる師には巡り合えず、
自分の医術は進歩しなかったのです。私は暗
澹たる気持ちで数年を過ごしました。



ついに文礼先生に出会う（1793年）

そうこうしていたある日、友人の家にたまたま寄宿していた文礼先生に出会ったのです。

貧富の差を問わず、どちらかと言うと貧しい追い詰められたボロボロの患者さんたちを、触り、診断し、湯液を処方した文礼先生の話は、わたしにとっては宝物のような話でした。



腹診術を学ぶ

文礼先生の医術を身につけたい。今を逃してはいつその機会があるかわからない。

そう思った私はその場で弟子入りを志願したところ、先生は、「君はわしの同志だ！」といてくださり、数か月の間、私は、文礼先生と寝食を共にしながら先生の診察を見学し、遅くまで先生との漢方談議に花が咲く毎日でした。



叔虎「腹証奇覧」を読み愕然とする（1800年）

その後文礼先生は、西に向かって旅立ち、東に別れた私は、いつも先生を思いつつ、知恵と知識と経験を積み重ねていきました。

そしてある日、とある書店で、腹証奇覧の表紙を見ました。それはまさしく文礼先生の著書でした。

私は、嬉しくて胸を躍らせて、その書を開いて、一字一句逃さぬよう貪り読もうとしたところ、愕然としました。



何故なんだ！

わたしが先生に習ったこと、感覚、表現が失われている！
先生は私に患者さんたちのお腹を触らせてみて、
あんな風にもこんな風にも教えてくださった。
それなのに、この本にはそれが書かれていない！
どうしてなんだ！
私は、深い嘆きと悲しみを感しました。



先生の診療する姿

先生はお酒がやめられず、自分自身も脳卒中にかかるなど不養生なところはありませんでしたが、誰よりも患者さんの気持ちが理解できる医者であったはずです。

そんな中、自分が病に侵されようと、どこまでも、自分に似た患者さんをきちんと腹証で見定めて、湯液を処方し、助け続けたはず。

あんな適当な絵と説明じゃ、後世に先生の素晴らしさは伝わらない。

きっと真髓まで理解しない弟子からこれでいいですか？と言われ、適当にうなづいて書が出来上がってしまったに違いない。



先生のええところを引き出すには コツがあるんです

先生には先生の知識を引き出す智慧のある弟子が必要なんです。

できるならすぐにでも先生のところに出向き、大いに語り合い、腹証奇覧の足りないところを増補したいという思いでいっぱいになりました。

しかし私にも日々の生活があり、なかなか難波にでかける機会を設けることができなかったのです。



再会 (1803年)

ついに私は大阪に行く用事をつくり、文礼先生を探し当ててついに再会することができました。

手足に不自由を抱えていた先生は、再会をこころから喜んでくれました。

そこでしばらく京阪の間に居を構え、何度も先生のところを往来して腹診の話を深めていったんです。



補翼の書に没頭する

そのうち、先生は動けなくなり、奇覧の補翼を私に頼んで、1805年に他界されました。

こうして1807年、私は身辺を整理して江戸の住まいをはなれ、京都に住まいを移して、著作に没頭しました。

そしてようやく1809年「腹証奇覧翼」（原田成賢子校閲）初編2冊を完成し出版することができました。



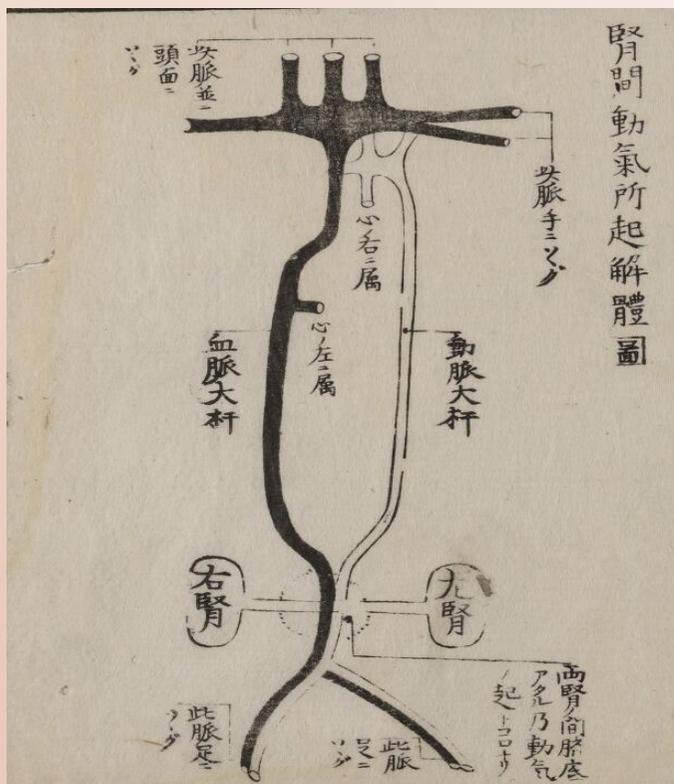
腹証奇覧翼の出版

- 1809年「腹証奇覧翼」（原田成賢子校閲）初編2冊出版
- 1833年翼（原田成憲子校閲）2篇2冊出版
- 1853年翼（原田養賢校閲）3、4篇4冊出版

著作にあたっては私が先生から得た腹診術に私自身の経験を加え、古典の中で私の心に落ちたもの、また時代の最先端の知識も、臨床に役に立つものは積極的にとりいれた解説に努めました。



解剖学も参考に



例えば、腎間の動についても
近年の解剖学の書物から
手に触れ目に触れる存在として
解説を試みました

